

宮城県第二回震災復興会議 参考資料(1)

復興の考え方：「流域自然共生都市」

海津波と山津波からの安全性の確保

東京大学 石川幹子

宮城県では、古来、山、川、海、の豊かな恵みを受け、時には猛威を震う自然環境に寄り添いながら、暮らしが営まれてきた。地震・津波という大災害の後も、背後の山や川が健全であるかぎり、次第に命の循環がもどりつつある。これは、大きな希望にほかならない。

この一方で、梅雨期の豪雨、台風の襲来により、いわゆる山津波（斜面崩壊、地すべり、土石流）の発生が、地震で地盤の緩んだ被災地域を襲うことが懸念される。過去の関東大震災でも、本震以後、土石流の発生が多発した。

今回の被災地である沿岸部の特色は、図3にみられるように、津波被災地の背後に土砂崩壊危険区域が集中的に分布していることにある。このため、県土の再生にあたっては、「山・海・川・街の連関の再生」であることを、基本的考え方として、明確に提示する必要がある。

この観点から、私は、宮城県復興計画の基本に、「流域自然共生都市」というヴィジョンを導入することを提案する。

「流域自然共生都市」とは、河川の小流域により形成される山・街・海を、連続する一体的な環境としてとらえ、その地域の土地自然の特性、潜在的能力（水源涵養量、土壌生産性、地形上の特色、生物多様性、開発可能性等）、災害が生じた時の回復能力（レジリエンス）等に基づき、持続的環境マネジメントを導入することにより、自然との共生の実現を可能とする街である。

現在、各市町村で復興計画の策定が進められているが、「流域自然共生都市」の考え方をまちづくりの基本に据え、かろうじて助かった命を、二次災害により失うことのない復興とすべきである。流域における自然環境が適正に管理されれば、それは、地域の暮らしの安定、豊かな水循環の回復、生態系の回廊の再生、生物多様性の回復につながり、何よりも地域固有の文化的景観を醸成していくことが可能となり、「21世紀の復興モデル」を提示する基盤となる。

復興ビジョン:「流域自然共生都市」

Natural Symbiosis City based on Watershed Landscape

海・川・街・山の絆を活かした県土の再生

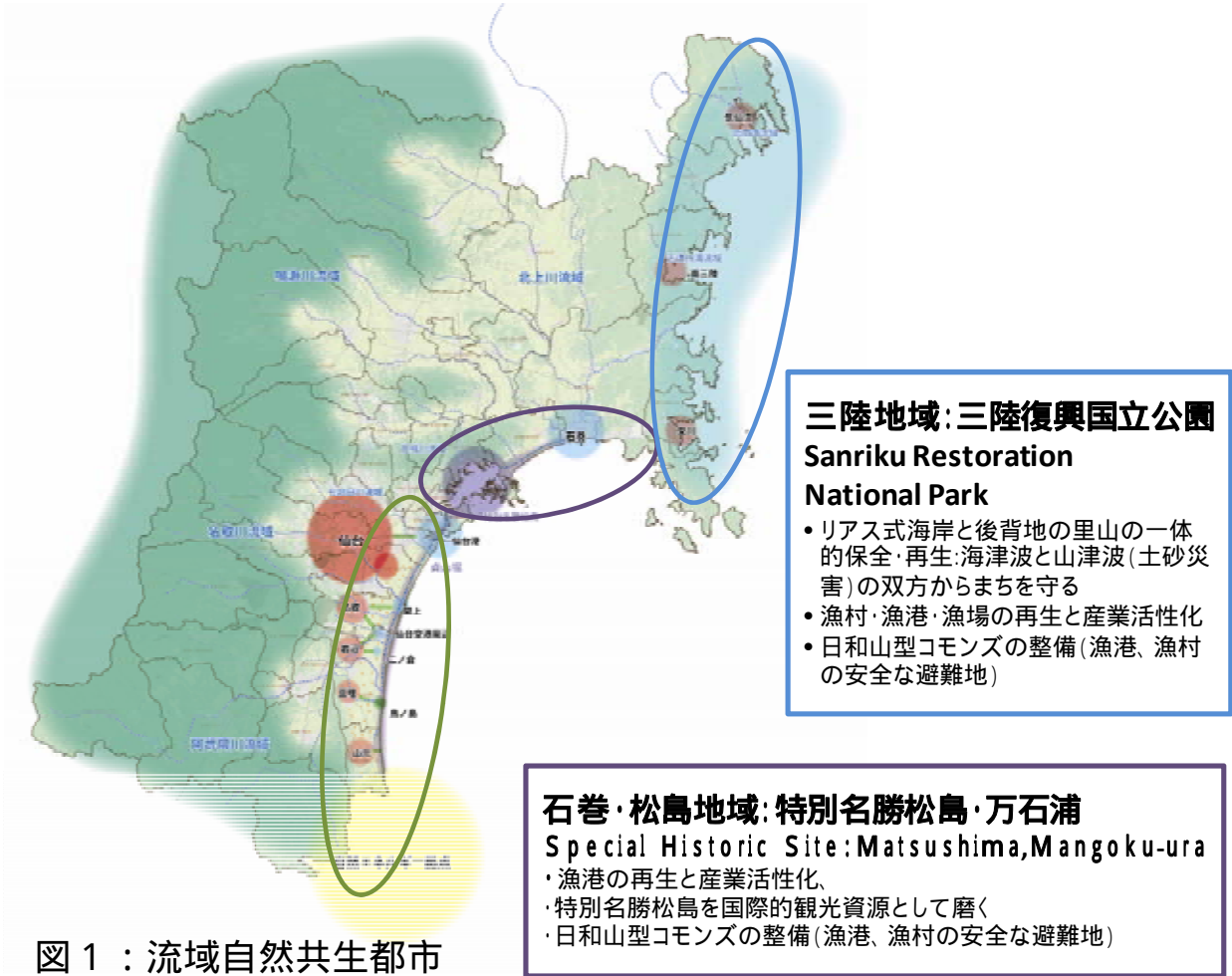


図 1 : 流域自然共生都市

仙台湾南部地域:千年希望の杜グリーンベルト

Green Belt of Forests of Hope for One Thousand Years

- ・沿岸部に多重構造の防災緑地帯として「千年希望の杜グリーンベルト」をつくる。
- ・防潮堤、複数の防潮林の丘、貞堀運河、道路の高上げ、コミュニティ居久根等により津波減災効果を有する新しいグリーンベルトを創り出す。事業は、従来の道路・海岸・河川・砂防・保安林事業に加えて、農村・漁村振興事業、国営公園を拠点地区に導入するなど、多様な手法により実現を目指す。このグリーンベルトの実現は、防災上、緊急性を要するため、「千年希望の杜グリーンベルト」タスクフォースをたちあげ、従来の縦割り行政を越えたプロジェクトのモデルケースを目指す。
- ・丘陵地の新たな造成は行わず、畑地、小集落などを移転地として活用し、伝統的な里山モザイク土地利用を形態を、復興ランドデザインとすることにより、流域自然共生都市を実現する。
- ・海津波と山津波の双方からまちを守る。

图 2：宫城县流域区分图



図3：海津波・山津波危険区域図

